

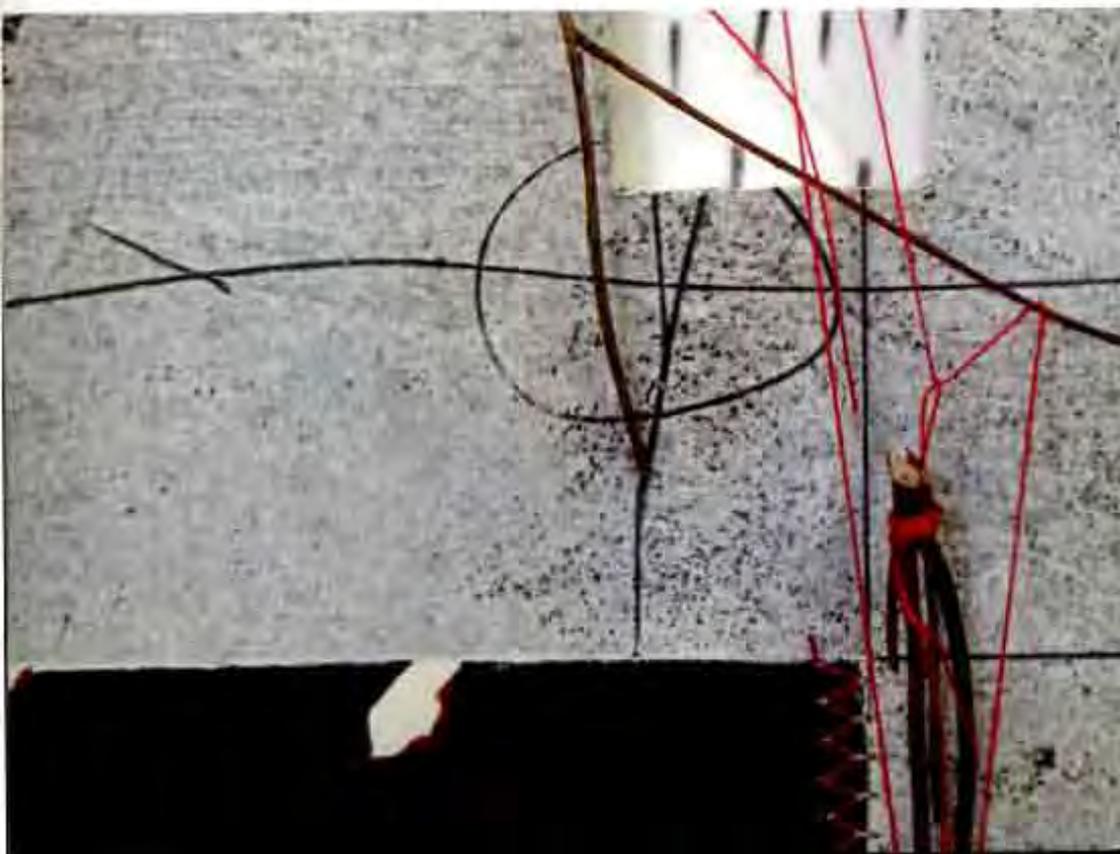
船 団

第112号

特集

彼は友人

—生誕150年の子規



甲斐 いちびん

夕立ち来て夕立ち風来てカサブランカ
回廊を巡る途方に暮れる穴探す
鈴鳴らし座敷わらし行く鱒雲
富有柿音たてて夕日落ちてくる
梨食らう世紀末はまだなのか
長き夜の底へ底へ星月夜
絢爛とおろおろおると行く枯野

香川 昭子

午後四時の宇宙の寝息赤とんぼ
ひだまりのなんおくねんの赤とんぼ
さよならのカツ井あれば赤とんぼ
ラ・マンチャの男追ってる赤とんぼ
親しらず出ている赤とんぼいない
赤とんぼ眼地球をはみ出して
赤とんぼ改行なしのラブレター

● 会員作品 ●

夏冬 春秋

八月がお休みだった頃の空
梅昆布茶涙の味がして晩夏
ほしのこえしやらしやらつてきこえるよ
むしのこえいちおくまんびきくらいいる
秋の月触れてみたいなら浮気です
泥棒と言われてにやーと缶ビール
ペンパイナポアポーペンの聖夜

川嶋 健佑

無機物にとげとげのある冬銀河
麵類を喰らう人類五月闇
オルゴール鳴り深海に冬来たる
花の名をつぎつぎ語る秋の旅
煙突に腰かけている夏休み
秋寒の空の継ぎ目がこのあたり
文体を崩す冬の帯解く

川島 由紀子

釉薬のつくる凹凸桜東風

柿日和キッチンノイズ我がノイズ

台風を待つ午後ひとりルージユひく

アリクイの脱走する日文化の日

人に煩惱茶碗蒸しに銀杏

本開く私を開く秋のカフェ

輪講の輪と水鳥の水の輪と

川副 民子

冬浅しペンギン痛風になる話

突然はいつも突然すすきの穂

でこぼこの気持ち抱えて冬来る

恋文を渡す前夜の曼珠沙華

ロケットに潜めた写真冬銀河

泣きじょうご松虫鈴虫くつわ虫

速達の来る予感して白芒

● 会員作品 ●

川添 光代

独り居に新聞香る春よ春

梅雨の朝甘あい紅茶にモーツアルト

正論と種なしピーマン苦手です

びわ剥いて非凡なること企てぬ

夏過ぎて象の時間を生きてみる

秋雨来て包丁を研ぐたっぷりと

秋夕立跳び込むヒール七センチ

河野 けいこ

ここからはひとりで行けよ秋の蝶

コスモスの一万本の迷ひかな

境内にカレーの匂ふ赤のまま

文化の日日本語だけの赤ん坊

おとうとの扁桃腺よ冬に入る

スリッパを揃へ勤労感謝の日

初雪やむすんでひらいてさやうなら

津波 古江津

短日のくち溶けのよいあんこ玉
冬前海みなゆるされる膝がしら
現生人類鼻のてっぺん冬ざるる
何度言っても締めないおんな冬麗らか
十一月つまり出しそびれの手紙
帰ると言ってからけんちん汁
冬日いま鞆の重さほど傾ぐ

坪内 稔典

空澄んで正倉院の琴鳴るか
ダリだったころの青梨ころがって
ころがって梨の三つとこのオレと
ごくごく人參ジュース雪になる
午後五時の人參たちよ乱舞せよ
しっぽまで赤くて人參身がもたん
尻もちも大福もちも十二月

● 会員作品 ●

鶴濱 節子

妖怪も夫も遊ぶ星月夜
秋晴れを連れてあの人メロンパン
鷹渡るピアノを弾いてみませんか
眼球がマグマを見てる時雨るるよ
かな文字のなまめかしくて神の留守
友情が時に漂流葱買うか
小春日を混ぜて絵筆は嗚呼と言う

寺田 伸一

大猿は哲人のかお漱石忌
猫に名を、芝居がかった漱石忌
モカさめてなんだか淋しい漱石忌
「泣いちゃえば」いつもデジャヴの漱石忌
「臨終」とりんごジュースを漱石忌
「死んじゃう」はただの口癖漱石忌
駄句に駄句濁流めきぬ漱石忌

中居 由美

九月一日母が野菊になりし朝
虫売りの中に紛れてはいないか
サーカスの檻はからっぽ曼珠沙華
外野席ガラガラ花野まで続く
水澄みて洗って乾くものばかり
秋ひとり音を集めて音捨てて
イソップ寓話冬の仕度に加えおり

中谷 三千子

松手入れ日時計元氣取りもどす
茱萸知らぬ子に見せたくて吠えられて
敬老の日これでわたくし地獄耳
中身より見た目で決めたラ・フランス
芒原つぎの約束なんとなく
秋風や曲ある文字を破り捨て
気温ほぼ平年並みでない九月

●会員作品●

長沼 佐智

この続き風に吹かれて牡丹鍋
冬バラよ無口変りませんけれど
十一月影の大きくなりたがる
モカの名は tomorrow 師走の雲は怪しげに
冬の月、影は先生いえピカソ
小春日の手のおむすびの形して
落葉一枚二枚三枚我一人

中原 幸子

寝違いのパジャマをたたむ残暑かな
こおろぎの草草草と立ち止まる
サンマ焼く後期高齢者だとうだ
せんせいは黒で腕組み秋の暮
ネックレスもつれて賀状発売日
朝ぶろのあごまで冬のはじめかな
落ち葉してドアにはドアの物語

火箱 ひろ

ふるさとの梨は青梨夢つづく

邯鄲はルルル晶子は多産系

天高し象舎の下は蟻の城

ニホンオオカミ剥製たちに良い月夜

鬼の子に着せようパステル色の蓑

探幽の弟という鴟日和

二条城の雀お前も蛤に

陽山 道子

涼新たアンティーク家具の傷なでる

整列のからだの細胞今朝の秋

十六夜の琥珀ひとつを身につけて

言いなりに動きます柿熟れたから

母留守の古家ぼんやり月の中

台風の欠片のひとつ木が折れた

台本のト書のように案山子いる

● 会員作品 ●

平井 奇散人

木簡の勤務評定春の雷

仮縫いの様なお二人菜種梅雨

遠来の春解きはなす七つ鉢

辛夷咲く一家六人トタン屋根

特別な日でもないのに豆ご飯

花曇りシャッター通り猫が行く

野良猫に道を尋ねる百間忌

平川 陽三

このところ妻不良めく曼珠沙華

渋柿や呆けて好かれる好々爺

ソツポ向く団栗独楽と反抗期

夜長し鏡と遊ぶ百面相

そわそわと箸を揃える早稲の飯

箸を出すあわて箸引く地蜂焼

すれ違う恵比寿顔との隙間風